

ガミラスの仮面　↳ 推理サイボーグ真田志郎の事件簿6　↳ 【第二稿】

遠野秋彦

プロローグ

真田は顔を上げた。

「そうです。あなたです」

ロビーの吹き抜けで2階のテラスから男が見下ろしていた。

どうやら真田は彼から呼ばれたらしい。

ここは、地元の文化センターだった。

大小のホールがあり、コンサートその他のイベントが行われていた。

真田は、とある講演会を聞きにここまで来ていた。しかし、目当ての講演会が入場開始するまでまだ10分以上あり、暇だった。暇になったのは、単純に道路が空いていてタクシーが予想より早く付いてしまったためだ。

「何か御用ですか？」

「今、演劇の稽古で手が離せません。そこの自販機でジュースを買って投げてくれませんか？　2人の将来有望な演劇少女のためと思って頼みますよ」

男は返事も待たずに小銭を投じた。

「やれやれ、まあ良いでしょう」

真田は小銭を拾うとそのまま自販機に歩いた。

「何を買いますか？」

「そっちのオレンジとグレープをお願いします」

真田は2つの缶ジュースを買うと、それを2階のテラスに投げ上げた。上手く相手はキャッチした。

「ありがとう。私は月影の内藤という者です」

オレンジとグレープの缶を持った少女達が顔を見せた。

「おじさん、ありがとう！」

そしてすぐに3人は引っ込んだ。

まあ良い。

真田はロビーのソファに座り直し、本を開き直した。

講演者は馬場ムラサキ。画期的な電気機器を開発していた有名企業の創業者だった。時々10年以上の先んじた技術的発想をする人物なので、真田は以前から気になっていた存在だった。

ロビーには静けさが戻った。

だが、その静寂はすぐに破られた。

「真田さん、大変です！」と教え子の古代と島の2人が駆け込んできたのだ。

「静かに。ここは騒ぐ場所では無いよ」

「それどころではありませんよ。あの北野が化学実験のレポートを一発で通したんです」

入学して最初に必ず受講する実験クラスはレポート地獄だった。まず新入生は不備を指摘されて突き返される。そこから成長が始まるのだ。

だから、誰しもレポート再提出の記憶がある。

だが、その新入生は一発でレポートを通してしまったという。

これは確かに珍事だろうな、と真田は思った。

「馬鹿」と島が叫んだ。「違うだろ。そっちも大事件だが、真田さんに話すことじゃないだろう？」

「そうだったそうだった」古代は頭をかいた。「大事件です。実はこの間の事件の時に知り合ったゲルさんですが、とんでもないことを言ってきました」

「とんでもないこと？」

「東京都現代美術館に、本物のゲールとしか思えない人物が来たとか」

「青い肌のゲールの候補は100人もいたんだ。門前払いを食らった連中も含めれば200人以上だ。その中の誰かではないのかね？」

「いいえ」と古代は首を横に振った。「彼は候補に入っていないんです」

「ふむ」

「そもそも、【青い肌のゲール】という遺言が間違っていたことが分かつ

た時点で、もう誰も青い肌のゲールを演じる理由が無いんです。それにも関わらず自分をゲールだと名乗るのは……」

「ただのコスプレイヤーかもしれないよ」

「いえ。ドラマのゲールに似せる努力を一切していないそうです」

「だがそれだけでゲールというのは無理があると思うよ」

その時、2階のテラスから清涼飲料水を求めた男が顔を出した。

「ゲールだって？」男は叫んだ。「本当にゲールなのか？」

だが2人の少女が【稽古中です】と言って部屋に取れ戻っていった。

「誰ですか？ ゲールを知っていたようですが？」と島はテラスを見上げた。

「さあ。演劇の稽古中だと言っていたが」

「見に行こうぜ」古代が叫んだ。

「迷惑になるから止めておきたまえ」

「でもゲールって言ったんですよ？」

【青い肌のゲール】問題はずいぶん週刊誌を騒がせたからね。知っている人もいるだろう」真田はソファに座って本を広げ直した。「ゲールに興味のある誰かがいっても驚かないね」

しかし、本を読むことはできなかった。

「失礼、いまゲールと聞こえてね」とかなり年配の男が奥から出てきた。

「あなたは馬場ムラサキさん」真田は立ち上がった。「私はあなたの話を

聞きここまで来たのですよ」

「私もゲールに興味ある凡俗の一人です。良ければ話をお聞かせが得ませんか？」

古代が身を乗り出した。「喜んで！ いくらでも話しますよ！ 僕はあの遺産相続の現場に立ち会ったんです」

「いえ。遺産ではなくゲールのお話を」

真田は笑った。

古代はむくれた。

島はやれやれという顔で古代を見下ろした。

## 第1章

「はやく波動シュートを撃たせて下さい！」

白い歯がキラッと光った。

色黒の優等生の北野だった。

「ばか、調子に乗るな」

古代は軽口を返した。

文武両道の北野は、古代の1年後輩の新生生だった。

年次を越えて学生が親睦を深めるためのスポーツ大会が毎年5月に行われていたが、そこで当然古代は北野と一緒にになった。

種目はサッカーだった。

古代はサッカー電撃隊の戦闘隊長（ビッグ・ワン）と言われていたが、新生生からは2人をレギュラーに抜擢した。文武両道の北野と、サッカー少年の坂本だった。坂本はトリックプレーの個人技ばかりに固執してあまりチームプレイに馴染まなかったが、北野はさすがに優等生だ。チームでの役割を理解して優秀なミッドフィールダーに徹してくれている。

だから、古代は必殺シュートの波動シュートを彼に教えた。

「よし、前が開いた。今だ、シュートを撃て！」とサッカー電撃隊の一員の南部が叫んだ。

「まだまだ！」と北野は叫んで敵陣に切り込んでいった。

北野は敵のディフェンダーをぎりぎりまで引き付けてから波動シュートを打った。ディフェンダーは反応出来なかった。

得点が古代らのチームに入った。

一同は歓喜した。

その後の試合は一進一退だった。

そのまま時間が無くなり、試合は1対0で勝利した。

「やった！」古代達は躍り上がった。

「おめでとう」見守っていた真田も拍手した。「勝利のお祝いにジュースでもご馳走しよう。安い祝いで悪いが」

冷えたジュースの缶が並んでいた。

「北野、今日のエースはおまえだ。おまえから選べ」

「じゃあ、グレープを頂きます！」

北野はグレープの缶を取った。

次は古代が手を伸ばした。

「じゃあ、俺は紅茶でも」

「ダメ」といきなり森雪が割りこんだ。「古代君には私のコーヒーがあるの！」

「お熱いことで」

一同がはやし立てた。

だが、本当に熱くて不味いコーヒーがポット入りで待っているとは誰も予想していなかった。

ジュースを飲み終えると北野はさっそく荷物をまとめた。

「じゃあ、俺下宿が近いんで、そっちで着替えて戻って来ます」

一同は顔を見合わせた。

「あいつの下宿ってどこだ？」

「学校の近くらしいぞ」島が言った。

「近くってどこだ？」

「俺は知らないぞ」

他の面々も知らなかった。

その時、同じ新入生の坂本がこっそり抜け出していたのに誰も気づかなかった。

「それより、頼まれたこと調べておいたわよ」と雪は言った。

「それは有り難い。それで紅天体ってなんだ？」

「昔大ヒットしたSF演劇のタイトルよ。七色の星団を舞台に赤い星に不時着したパイロットのサバイバルが始まるのよ」

「なるほど。赤い星でドラマが進行するから、紅天体か」

「そういうこと」

「それでその紅天体の何が問題なんだ？」

「主演の内藤という人が権利を持っているのだけど、普通の役者では再

演に同意しないのよ。それで特に演技が上手い女優がヒロインの座を巡って争っているそうよ」

「あ、その話、知ってる」と相原が身体を乗り出した。「そのうちの1人は、北上夜曲のカバーでデビューした北上マヤちゃんだ」

「なんで知ってるんだよ」

「だって北上夜曲は好きだし」

「それで、もう1人の女優はどんな女なんだ？」古代は身を乗り出して、雪につねられた。

「俺は知らないよ。北上夜曲歌ってない俳優なんかに興味無いし」

その時、後にいた真田がボソツと言った。「流田姫亜弓」

「真田さん、よく知ってますね」

「なに、一度聞いた名前だ。印象に残っていただけだ」

「それで、どんな女優なんですか？」

「詳しいことは知らないよ。オペラ座の灰燼とか、キャロツツに出いていたらしいが」

「なんだ知ってるじゃないですか」

「君は見たこともない演劇に出ていることが分かった程度で、どんな女優か分かってしまうのかね？」

「うっ」古代の負けだった。

その時、駆け込んでくる男がいた。

新入生の坂本だった。

「た、大変です」

「どうした、坂本」

「北野が消えました」

「消えた？」

「カラオケボックスに入ったと思ったら急に消えて、出てきたのは女の子だけ。あとから中をチェックしても誰もいません」

真田以外の一同は顔を見合わせた。

ミステリアスな北野に、もっとミステリアスな話が加わったのだ。

しかし、真田は表情1つ変えなかった。

「坂本、君は上手に撒かれたね」

「えっ？」

「君の尾行に気づいて、カラオケボックスに入った振りをしたのだろう」

「まさか」

「入ったふりだけしてそのまま裏口から出てしまったのだろう。そのあとで、もともとボックスに入っていた女性が出てきただけだろうね」

「そんな、なんて卑劣だ」

「卑劣なのは君の方だろう。あろうことか、クラスメートをこっそり尾行するなど、人としてどうかと思うよ」

「でも近所に住んでいるなら気になるじゃないですか」

「坂本君」と真田は厳しい顔になった。「じゃあ、パンツ1枚でグラウン  
ド1周ね。頭を冷やしなさい」

「そんなあ」

坂本は走り始めた。

古代は質問した。「どういうことですか？」

「北野君の住所は、大学の近所ではないよ」と真田は言った。「近くに下宿があるというのは嘘だろう」

「なぜそんな嘘を」

「身体に誰にも見られたくない秘密があっても驚かないね」

「まさか宇宙人とか？」

「変な形の痣があるだけで人には見られたくないと思うよ」

「痣か」

「実際に何があるのかは一切知らないよ。彼の身体検査をしたわけではないからね」

その時、古代の携帯が鳴った。

「失礼します」と古代は携帯に出た。

残された面々は話を続けた。

「ところで、この紅天体という演劇。ヒットした20年後ぐらいにもう

一度話題になった。今から30年ほど前だ」と真田は言った。「話題になった理由が分かるかい？」

「再演していない演劇が話題になるなんて」と太田が考え込んだ。

「話題になった理由は劇そのものではないわけだね」と南部も考え込んだ。

「分かったぞ。主演女優が結婚したとか」島が言った。

「でなければ、主演女優が離婚したとか」森雪が言った。

「主演女優が死んだんだ！」加藤が叫んだ。

「主演女優の名前は吉永サリーというが、まだ存命だよ」真田が苦笑した。

「答えを教えて下さいよ」太田が真田にねだった。

「実は、演劇に出てきた七色の星団とそっくりの星団が大マゼラン星雲に存在することが観測されたんだ。偶然の一致にしては見事に合っているということ、一時は話題になった」

「それは知りませんでした」

「七色混成発光星域というがね。あれを七色星団と呼ぶのは、紅天体由来なんだ」

「へえ」と一同は感心した。

だが、電話を終えた古代が戻ってくると空気は一変した。

「ゲルさんからの電話です。本物のゲールがまた出たそうです」

「ほんとか！」島が叫んだ。

「見に行こうぜ」と南部が身を乗り出した。

「その前に訂正しよう」と真田は言った。「本物のゲールではなく、本物のゲールとしか思えない男なのだろう？」

「いやまあ。それはそうなんですけど」古代は頭をかいた。

「ともかく急いで行こうぜ。清澄白河だっけ？」

「そう。そこから徒歩で行ける現代美術館」

「よし、みんなで行こう」

「真田さんも是非」と古代は真田の手を引いた。



「私は遠慮しておくよ。学科対抗戦で貴重な時間が食われたのだ。研究を進めない」と

一同はがっかりした。明らかに、真田は【本物のゲール】という話を信じていなかった。まあ当然だ。本物のガミラス人、ゲールが東京にいるなど、普通はあり得る話ではない。

しかし、それでゲール見物を諦める彼らではなかった。一同は集団でぞろぞろと更衣室に向かった。

丁度その頃、最近全通したばかりの新しい道路で事故が発生していた。

その道路は曰く付きだった。

途中までは建設されたものの、途中に【土地は売らない】と居座った家が有り、全通が遅れていたのだ。しかし、数ヶ月前にやっと開通にこぎ着けたのだ。長らく、【道路はあれど通る車はない(どこにも行けないから)】という状態が続いていたので、車道をつっ切って近道する習慣が土地の者にはできていたが、それも過去になった。便利な道路なので、目的地まで通行可能ならどの車も利用したかったのだ。

土地の者ではないが、よくこの辺りのスタジオで練習していた北上マヤを応援するために、しばしば馬場ムラサキはこのあたりを訪れていた。しかし、紅天体の再演という話が浮上してからはあまりそのスタジオは利用されていなかった。必然的に馬場ムラサキはこのあたりを訪れていなかった。だから、道路の全通ということも知らず、以前のように車道をつっ切ろうとしたのだ。

もちろん、車が走ってくるから危険だと言うことを馬場ムラサキは認識したはずであった。しかし、車道に足を踏み入れた時点で驚いて引き返した時に、足を滑らせたらしかった。その時の当たり所が悪く、馬場ムラサキは意識を失った。急いで呼ばれた救急車の中で馬場ムラサキは意識が戻らないまま息を引き取った。

誰かに責任がある話でも無かった。

路面はしっかりしており、そこで転んだのはあくまで慌てた馬場ムラサ

キだけだった。路面の管理が悪かったという話ではあり得なかった。

また、特定の車が馬場ムラサキをひき殺したという話でも無かった。

この事故の話題は、それから1時間以内に京葉技術大学でも盛り上がった。約1キロ先で起きた事故だ。話が伝わるのも早い。そして、話は盛り上がった。なぜなら、この事故の影響で道路が一時的に閉鎖されたので、その影響で一部の講義が休講になりそうだという噂が流れたのだ。だが、閉鎖はすぐ解除され、講義が休講になることはなかった。車で移動していた講師達も、最大5分遅れ程度で大学に到着していた。

一同はガツカリして事故のことを忘れた。

受け止め方が違ったのは真田だけだった。

テレビの報道で詳細を知った真田は、死んだ被害者が、数日前に講演を聴きに行ったばかりの相手だと気づいたのだ。

馬場ムラサキの葬式で、喪服の真田は残念な気持ちを抑えられなかった。焼香が終わると、真田は式場から出ようとした。

その時、入口で騒動があった。

「ディーゼラー機関長！ あんた、ディーゼラー機関長なんだろう！」

「亡くなられたのはそんな名前の方ではありません！」

何やら男が女性の遺族と揉めていた。

「失礼」と真田は前に出た。「あなたのお名前は？」

「ゲー、いや、剣持流左衛門という」

「ここは非凡な発想で様々な製品を実用化した馬場ムラサキさんの葬儀です。さつきからあなたが言っているディーゼラーという人ではありません」

「その非凡な発想が問題です」

「といますと？」

「この方が発明したとされる品々は、ディーゼラー機関長なら知っていて当然のものばかり。馬場ムラサキとは、ディーゼラー機関長の偽名ではないかと思ったのです」

「劍持流左衛門が偽名であるのと同じように？」

その男は返事をしないで眉をつり上げた、

「あなたがどこから来た何者かは知りませんが、日本で生まれ育った過去がないことは分かります。馬場ムラサキさんにも」真田は言った。「ならば日本人名ではない別の名前があつても不思議ではない」

「ほう」と相手は言った。「私が日本人ではないとなぜ言い切れますか？」

「理由はいくらでもあります、顔に塗ったドーランだけでも十分でしょう。本当の肌の色が何色かは知りませんが、それを誤魔化していますね？」

「なるほど。この間来た若者達と違って、あなたには見る目がありますな」

真田は嫌な予感がした。「もしや、その若者達とは、あなたをゲールに違いないと指さしませんでしたか？」

「何故ご存じで？」

「あれは教え子です」

「ならば彼らに伝えて頂きたい」

「何をですか？」

「ゲールに関わるなど」

「理由が明らかにならないと納得しないと承知しますが」

「明確な理由はまだありませんが、どうも不穏なものを感じるので」

「といいますと？」

「この人は殺された可能性があります」

「それは不穏な言い方ですが、根拠は？」

「私と私の仲間、仮にガミラス人と呼びましょう。ガミラス人が何人かこの時代の東京に飛ばされていますが、誰かが何らかの理由でガミラス人がガミラス人と出会うのを阻止しているようなのです」

「なぜそのように思われたのでしょうか？」

「古物商でガミラス語のメモ帳を発見したのです。50年ほど前に死んだ男の遺品です。そこに、その疑惑が書いてありました」

「その仮説が正しいとして」と真田は言った。「ガミラス人が出会うこと

を阻止して何のメリットがあるのでしょうか？ 同胞なのでしょようか？」

「ええ。そうです。同胞です。しかも最後は同じ船に乗っていました」

「なるほど。では、剣持さん。あなたはこれからどうするおつもりで？」

「この馬場ムラサキと名乗る人物がディーゼラー機関長であるか否かをまず確認したい。そして、もしそうなら誰が何のために殺したのかを知りたい。そして、可能ならば母国に帰りたい」

「分かりました」真田はうなずいた。「ただ、この場はお帰りになった方が良いでしょう。馬場ムラサキさんには家族がいて、ここは葬儀の場だ。騒ぎが起きることは遺族からも好まれない。遺族から嫌われることは、あなたの捜査にもプラスにならない」

「そのようなだな。今日は帰ることにする」

相手の男はそのまま引き返して、雑踏に消えていった。

その時、揉めていた相手が頭を下げた。

「ありがとうございます。私は馬場ムラサキの娘のサキと申します。失礼ですが」

「京葉技術大学の真田です」

「あなたが有名な推理サイボーグ」

「ただのあだ名ですよ」

「丁度良いご縁……といったら失礼ですが、実はもう1つお願いしてよろしいでしょうか？」

「为什么呢？」

「実は正体が分からない遺品が1つありまして、何かの装置なのですが何をするものなのか全く分からないのです。工業大学の先生に見て頂ければと」

「見るだけでよろしいのですか？」

「はい。見て分かる範囲だけで良いので、教えて頂きたいのです」

「いいでしょう」

サキは真田を家に奥に連れて行った。

うっすら埃の積もった機械だった。

何かの扉、といった感じの装置だった。扉には多くの機器が取り付けられていた。強いて言えば、青いタヌキが主役のアニメに出てくる、どこにも行けるドアに似ていた。

だが、真田はそれを見た瞬間にうなった。

現代でも入手できるパーツで組まれているが、三世代以上隔絶した未来技術だ。

「やはり、馬場ムラサキは天才だ。これほどのものを残して行ったとは。

これを解析するだけで人類は進歩できるでしょう。それだけ革新的な機械です」真田は説明した。

「でも、これは20年前からこのままですのよ。途中までは一生懸命作っていたのに、ある時急にこれを放置して、やめてしまいましたの。最近、若いなんとかという演劇少女を支援するばかりで」

部屋の隅でスマホをいじっていた少年が顔を上げた。

「北上マヤだよ。おじいちゃんが支援していたのは」

「そうね。そんな名前だったわね」

「だが、これだけの機械を途中で放棄した理由が分からない」

「ガミラシウムだよ」と少年は言った。

「ガミラシウム？　なんだそれは？」

「この機械は全て完成しているんだって。でも、起動するには1グラムでもいいからガミラシウムが必要なんだって。でもガミラシウムが入手できる可能性がカケラほどもないので、おじいちゃんは絶望したんだ」

「真田さん」とサキは向き直った。「是非ともそのガミラシウムとやらを入手して、この機械を動作させてみてはくれませんか？」

「しかし……、自分にとっても初めて聞く名前です」

「そうですか。残念です」

「しかし、それは別としても、この機械は研究に値する。素晴らしい業績だ」

「では、この機械は真田さんにお預けします」

「私に？」

「はい。この機械の目的が分からない場合は、ゴミとして処分すると遺族一同で申し合わせております。何かのご縁ですから真田さんに差し上げます。どうぞご自由にお使い下さい。あとからトラックで大学まで運ばせます」

「それは、何とお礼を言つて良いか」

少年が立ち上がつて言つた。「じゃあ説明するね。おじいちゃんから使いは聞いてるんだ」

「あら私は聞いてないわよ」とサキがむくれた。

「この小さい皿にガミラシウムを乗せて、こっちの大きなボタンを押す。それだけ。これで、ゲートが動作して扉の向こうはお爺ちゃんの生まれた場所につながるんだ」

「生まれた場所とはどこだい？」

「そこまでは知らないよ。お爺ちゃんもそこは教えてくれなかつたし」

「たぶん、七色高原のことですわ」と先はいった。「父は満州の七色高原の出身ですから」

「違うよ」といきなり少年が否定した。

「何が違うのよ」

「満州に七色高原は存在しないんだ」と少年は言い切つた。「地理の先生に調べてもらったんだから間違つて無いはずだよ」

「いやいや。彼の故郷は満州国新京だ」と真田は言つた。「講演会の略歴にそう書いてあつた。これは確かに実在する」

「それは書類上の故郷ですわ」とサキは言つた。「本当に産まれた場所は違ふのだから、父は言つていました」

「違う？」

真田は考え込んだ。

旧満州国と往復できる【ゲート】という話にもわかに信じがたいが、そもそも彼が産まれた本当の場所がどこにあるのかも謎だというのか。

真田は考えた。

馬場ムラサキの真実はまだ霞の向こう側にある。

さまか本当に異国出身のディーゼラー機関長が馬場ムラサキだともい  
うのだろうか？

真田はその考えを振り払った。

真田が家の外に出ると、葬式の列席者達も帰宅しつつあった。

真田を追い越して、美しい少女が1人歩いて行った。

真田はその顔に見覚えがあった。北上マヤだった。

晩年、馬場ムラサキが支援していたという演劇少女だ。

真田は思わず声を掛けた。

彼女は振り返った。

「ええ。支援を受けていました。名前を名乗らないので、最初は江戸紫  
の馬場の人と呼んでいました」

「江戸紫？」

「海苔の佃煮の製品に、そういうものがあるでしょう？ 最初に送って  
頂いたのがそれだったので」

「なるほど」

「それで何か私に御用？」

「馬場ムラサキさんは何かの機械を作っていたのです。しかし、途中で  
放棄してしまった。そしてあなたを支援した。私はその機械の方に興味が  
あるのです」

「1つ訂正があります」

「なんででしょう」

「放棄などしていません」

「ああ、既に完成していたというのでしょうか？ ガミラシウムとかいう  
ものの以外は」

「あの人は最後までガミラシウムを探していました」

北上マヤは紙を取り出した。特急券だった。

「これは、明日使う予定だった特急券です」マヤは真田に渡した。「船形  
山の山奥で怪しい物質が見つかったというので、それがガミラシウムか確  
認しに行く予定でした」

「しかし、なぜあなたが特急券を？」

「一緒に行く予定だったからです」

「2人切りで？」

「ええ」

「詳細は聞かない方がよろしいのでしょうか」

「年の差があっても大人の男女が旅行すればすることは1つですわ」

「やれやれ。では、馬場ムラサキさんの本当の肌の色を知っていたのですね？」

急に北上マヤの表情が変化した。

「以上です。お引き留めして時間を取らせました。ありがとうございます  
す」

真田は頭を下げ、北上マヤは立ち去った。

北上マヤは、あまり悲しみに震えてはいなかった。

「こ、これは！」

と【本物のゲール】と呼ばれている男は、馬場ムラサキが残した機械を見て驚いた

「亜空間ゲートではないか」

横で古代と島が自慢げだった。

「おい、連れてきて良かったな」と島は言った。

「ああ。これほど感動してくれるとは」と古代もうなずいた。

場所は真田の部屋だった。

執務機の横に問題の機械が設置されていた。

約束通りトラックで運ばれてきたのだ。

「使い方は分かりますか？」と真田は質問した。

「分かる。これは亜空間ゲートだ。時間と空間を飛び越えて、別の場所に行ける。行き先は我々がいた時代のガミラス星にセットしてあるようだ」

「では動かしてみてください」

「無理だ。ガミラシウムがない」



「あなたもガミラシウムを『存じで?』」

「ガミラス人なら誰でも知っている」

「ガミラシウムとはいったい何でしょう?」

「ガミラス特有の放射性元素だ」

「そのような名前の元素は存在しませんが……」

「地球の人間がまだ発見していない放射性同位体だ。いやより正確に言えば、ガミラスの独自の地質が産み出した特殊な放射性同位体なので、他の星で発見されたという報告が一切ない。地球にも無いだろう。無いものは見つけようがない」

「馬場ムラサキさんは、船形山で見つかった怪しい物質がそれではないかと疑っていたようですが」

「船形山……。確か、手に入れた古いメモにも書かれていた地名だな。噂があつて確認に行ったら、そこにあつたのはただの強化テクタイトの大きな塊だったと書かれている。本当にガミラシウムがあれば彼が見つけていただろう」

「なるほど」

「ガミラシウムを持っている可能性があるのは、ガミラス人だけだろう」

「ではあなたは船に乗りですか?」

「あなたは船に乗るときに燃料をかついで乗りますか?」

「いえ……」

「そういうことだ。ガミラス人もガミラシウムを担いで乗るわけではない。ほとんどのガミラス人はガミラシウムを見たこともないはずだ」

「なるほど」

「ただ……」

「ただ。なんででしょう?」

「何かの機械の一部に埋め込まれている可能性はある。たとえば私が東京に来たときに持っていた翻訳機は核バッテリーで動作していた。今は動作していないがね」

「それにガミラシウムが使われていたと?」

「そうだ。しかし、動力源として酷使したから、もうただの石ころになったがね」

真田はこのゲールという男を値踏みした。

普段なら嘘八百を言う男だと思うところだが、今は馬場ムラサキの機械がある。この機械を上手く説明できるのは彼だけなのだ。

その時、ドアをノックする者がいた。

「失礼します」

「北上マヤ君だったかな？」真田は顔を上げた。

ドアを開けて立っていたのは新入生の星、北野だった。

「自分は北野ですが……。レポートをお持ちしました」

「おっと失礼。そっちの箱に入れて置いてくれ」

「わかりました。では失礼します」

北野は立ち去った。

「真田さん、なぜ北上マヤだつて言っただんですか？」島が質問した。

「同じ北で始まる名前だから間違えたんですか？」

「ただの間違いだ。気にしてはいけないよ」と真田は言った。

「あの女、ディーゼラー機関長の葬式にも来ておったな」とゲールが言った。

「女？ あれは男ですよ」と古代は説明した。

「地球人の性別はよくワカラン」

「まるでガミラスとは地球とは別の星のような言い方ですね」真田はジツとゲールを見た。

「あ、いや。今の一言は忘れてくれ」

慌ててゲールは帰って行った。

残った古代と島は真田に質問した。

「なんですかあれは」

「宇宙人気取り？」

「それとも、やっぱり本物？」

「宇宙人ポール？」

「それを言うなら宇宙人ゲールだ」

「君たち」と真田はぴしゃりと言った。「ここにあの人を招待したのは、馬場ムラサキさんの機械の正体についてのヒントを知っていればと思つてのことだ。彼が自分を宇宙人だと信じていたとしても、君たちまで信じる必要は無いのだよ」

古代と島は小さくなった。

## 第2章

いきなり真田の部屋が華やいだ。

古代を探しに来た雪が真田の部屋に現れ、それに続いて豪華に髪を結い上げた少女が訪れたのだ。

まだそこにいた古代と島が、ポカンと見とれた。雪はむくれた。

真田はその顔を知っていた。

女優の流田姫亜弓だ。

「何の御用でしょう？」

「こちらにゲールさんが来ていると聞いたのだけど」

「残念ながら入れ違いです。さつき帰りましたよ」

「それは残念。いいわ。ついでだから、いいことを教えてあげる」

「この機械の正体についてでしょうか？ それともガミラシウムの行方？」

「どちらでもありません。この学校の北野という男の正体についてですわ」

「それはライバルを蹴落とすために、密告するという意味でしょうか？」

流田姫亜弓は突然顔をこわばらせた。

「知ってらしたの？」

「薄々は」真田はうなずいた。

「密告って何ですか？」と古代と島が身体を乗り出した。

「内密の話が多く言い方が難しいのだがね」

「私が全て暴露して説明しますわ」流田姫亜弓が胸を張った。

「それは内藤さんも承知の上での話かね？」

「そ、それは……」

「確かに、北上マヤは信じられないほど優秀な女優だ」と真田はうなずいた。「君が焦るのも分からなくもない。だが、君も非凡な才能を持っていると評価されているのだろうか？ 実力で主演の座を勝ち取ってみたいまえ」

「失礼します」

流田姫亜弓はそのまま帰って行った。

立ち去る瞬間、真田は流田姫垂弓がニヤリと一瞬笑ったことに気づいた。なるほど、この非凡な演技力を持った少女は、【ライバルを蹴落とすために密告する嫌な女】を演じたわけか。

だが、真田は落ち着いてそのことを考えられなかった。

古代達が抗議したからだ。

「真田さん。ぜんぜん話が見えませぬ」と古代が言った。

「そうですよ。説明して下さい」島もうなずいた。

「あの。もしかして、あのこと？」と雪が小声で言った。

「あのことってなんだ？」と古代が叫んだ。「何か知ってるのか？」

「ええ。北野君の件」

「北野がどうしたって？」

「彼ね、実は……」

「雪君。そこまでだ」と真田が遮った。「三ヶ月の間、我々は何も言わないことになっている」

「何だよみんな。何か知ってるのかよ」と古代が歎いた。

「これは、俺達に自力で推理しろってことだろう？」と島が古代の肩を叩いた。

古代と島は部屋をでて行った。

そのあとで雪は質問した。

「真田さんはどこまでご存じなのですか？」

「北野という学生には3ヶ月間手を出すなという指示だけだ。学長は紅天体の隠れファンだからね。内藤さんに便宜を図ったのだと思う」

「では北野君の正体はあくまで推理で推測を？」

「推理と言うよりも観察だね」

古代と島は喫茶店でコーヒーを前に議論を始めた。

「よし、ともかく分かっていることを書きだそう」と島はメモ用紙を取り出した。

「そうだな。流田姫垂弓さんは北野哲の正体を知っていて暴露しよう」と

した」

「北野には正体があるってことだな」

「暴露することはライバルを蹴落とすことになるらしい」

「ライバルは北上マヤだな」

「北上マヤは、理由は分からないが、真田さんが名前を出した。関係あるらしい」

「そうだな」

「あと、雪は察しているらしい」

「女性は神秘だからな」

「つてことは、考えれば考えるほど答えは1つしかない」

「まさか北野の正体は北上マヤ？」

「俺はフェイクだと思う。簡単すぎる」

「そうだな。いくらなんでも北野は完全に男だ」

「確認したのか？ 一緒に風呂に入ったとか、ツレションに行ったとか」

「いや。でも性格的に間違いなく男だよ」

「なぜそう言い切れる」

「一緒に女のヌード写真集見たし」

「ヌードだって？ 森君に言いつけるぞ」

「す、すまん。それは勘弁してくれ。秘密なんだ」

「分かったよ」

「じゃあ北野の正体は何だろう」古代はクビをひねった。

島も考え込んだ。

「北上マヤの弟だとか」古代は叫んだ。

「正体を暴いても別にライバルを蹴落とすことにならないよ」

「じゃあ、内藤さんの息子か孫」

「ますます関係ないよ」

「それじゃ、さまかゲールさんだとか」

「なんであの人が若作りして大学に来てサッカーするんだよ。それより、あの人は紅天体に関係ないし」

「そうだ。紅天体のあらすじを調べようぜ。そもそもどんな内容か知らないんだ」

「いいとも。図書館に行こう」

雪は紅天体の本を手を取った。

「少し、興味が出てきました」

「紅天体にかね？」と真田がパソコンの画面を見ながら質問した。

「ええ」

「演劇そのものかね？ それとも、どちらの女優が主演の座を射止めるかかね？ あるいは、演劇関係者そのものに興味があるとか？」

「最後の1つですね。たとえば、この月影の内藤さん。若い頃は惚れ惚れするような美青年じゃありませんか」

「なるほど」

「特にこの指にはめたエメラルドの指輪」

「その石はおそらくエメラルドではないよ。エメラルドはそういう輝きを放たない」

「でも緑の宝石でしょう？」

「緑だから全部エメラルドというわけではないと思うよ。翡翠、グリーンターコイズ、アレキサンドライト……いくらでも緑の宝石はある」

「へえ、真田さん物知りですね。宝石の話題で女性を口説くとか？」

「残念ながら宝石の話題では女性にいつも逃げられてしまう」

「まさか」

「人工ダイヤモンドがいかに工業で役に立つかを話してしまうのでね」

「それは……仕方がありませんね」

「しかし、厳密な種類までは分からないな。緑の宝石は多いが、全てを知っているわけではないのでね」真田はしげしげと写真を見つめた。

「あつ。もしかして、それがガミラシウムとか。馬場ムラサキさんの機械に入ると機械が動くとか」

「森君。そういう都合の良い事態がそう簡単に起こることは期待できない

いよ」

「ねえ真田さん。写真じゃなくて現物を見たらどんな宝石か区別できま  
すか？」

「できるとは断言できないが、写真よりは確かに鑑定可能だろう」

「じゃあ電話して見られるか聞いてみましょう」

「迷惑だからやめておきたまえ」

「ダメ元で聞くだけですよ」

「ならば、尚更やめておきたまえ」

雪はむくれた。

大学の図書館に、紅天体の資料は無かったが司書の人が親切に調べてく  
れた。

その結果、出版されたシナリオ集が広尾の都立図書館にあると分かった。

古代と島は、その足で駅に向かった、

「快速が来た。あれに乗ろうぜ」古代が促した。

「俺は空いてる各停の方がいいな。座れるから」

「でも遅いとじれたいじゃないか」

島はやれやれと古代に付き合った。

電車はびゅんびゅんと途中駅を通過して走った。

「この調子なら思ったより早く着きそうだな」

「馬鹿。どのみち京葉線は東京駅での乗り換えが遠いんだよ」

「もっと手前の駅で乗り換えようぜ。新木場で地下鉄に乗り換えるとか」

「それも良さそうだな。んっ？」

島がスマホをポケットから出した。

振動していたらしい。

「北野か。次の駅のホームを確認してくれって？　なんで俺達が電車に  
乗っているのを知っているんだ？　え？　加藤から聞いた？」

「ああ、島がトイレに行っている間に加藤に会ってさ。そこで事情は話  
したよ」と古代は頭をかいた。



「分かった。分かった。次の駅のホームを確認するよ」島は通話を切った。

古代は島に質問した。「何だって?」

「次に通過する駅でゲールを見かけたというが、すぐに発車して良く分からなかったというんだ。俺達に確認してくれって」

「ゲールさんがなんでここに」

古代と島は通過するホームをジッと見つめた。

急に島が目を見開いた。

電車は通過駅のホームを高速で走り抜けた。

「古代、今の見たか?」

「今のってなんだ?」

「ホームにいた人だよ」

「誰がいたんだ?」

「流田姫垂弓とゲールさんだよ」

「まさか、俺には見えなかったぜ。他人のそら似だよ」

「でも、2人とも、さつき真田さんの部屋に来たときと同じ服だったぜ」

「えっ?」

「古代、このへんには何がある? ラブホテルとかあったか?」

「うーん、特にないと思うけど。ああ、でも、ネズミーランドの客を目

当てにした豪華ホテルはあったな」

「まさか。2人でホテルにお泊まりとか?」

「ご休憩かもしれないぜ」

「どっちにしても同じだよ」

「しかし、詮索しても結論は出ないな」

「流田姫垂弓とゲールさんが仲良くしても、あまり関係ないし」

「古代には雪さんがいて、俺にはテレサがいるものな」

「まあいいか、忘れよう」

「そうだな」

古代と島は地下鉄を乗り継いで、都立図書館に向かった。

用意されたパソコンで検索して、出てきた紙を窓口を持って行くと待たされた。

「2199番だ。あの画面に2199が出ると準備完了の合図だ」

「出るまでは暇だな」

「ああ、適当にそのへんの本でも見てようぜ」

だが古代は30秒で飽きた。

「じれってえ！ 投球フォームの本を見ているのに、実際に投げる事ができないなんて！」

「静かにしろよ、ここは図書館なんだぜ」

「へいへい」

「それより、これを見ろよ。当時本当に紅天体は人気があったらしいぜ」

「へえ。渋谷の劇場で行列って新聞記事か」

「そうだ。こっちは主演女優の写真」

「女優？ 男じゃないか」

「あれ。誤植かな？」

「女優の写真はどれだよ」

「こっちだこっち。これは正真正銘の女優」

「ああ。ちゃんとスカート履いてるな」

そのとき、画面に2199という番号が追加された。

「よし。来たようだ」

島が本を受け取った。

「一緒に読むぞ」

だが、ページをめくっているうちに古代は寝てしまった。

島だけが黙々とページをめくった。

「あっ！」 島が声を上げた。「謎が解けた」

古代は目覚めた。「うるさいなあ。なんだよ、島」

「謎が解けたんだよ」

「謎なんてあったっけ？」

「ほら。主演女優の写真に男が写っていた問題」

「それで原因はなんだ？ 編集者のミスか？」

「そうじゃない、紅天体はヒロインの男装シーンがあるんだよ。まるで本物の男に見えるような惚れ惚れとした男装だと。男に見せかけてヒロインが出てくるところが、観客にサプライズを与えていたんだ」

「そうか。すっかり騙された。この写真は男装か。でも完全に男に見えるぞ」

「そうだ、紅天体の主演女優は、可愛いだけじゃダメだ。演技力があるだけじゃダメだ。完全に男に化けることができるぐらい、突出した演技力が必要なんだ」

「つてことは、紅天体の主演女優には100%男に見える男装修業も必要ってことだな」

「おい古代。分かったぞ」

「何が分かったんだ？」

「北野の正体だよ」

「誰だ？」

「紅天体の主演候補の2人のうちのどちらかだ」

「どっちだと思う？」

「さっき、北野が来た直後に流田姫亜弓が来ただろう？ そんな短時間で男装を解けるとは思えないし、そもそも身長が違いすぎる。別人だろう」

「じゃあ、北上マヤ……」

「身長も似通っている。肌の色黒さはメイクだろう」

「分かったぞ。真田さんが北野と北上マヤを間違えたのも、ゲールさんが北野を女と見誤ったのもそのせいかな」

「ああ。北野は女で北上マヤだったんだ」

「大学に戻るぞ」

「ああ」

2人は席を立ち上がった。

電車を待っている間、たまたま太田から島に電話が掛かってきたので、

島が発見したことを言ってしまった。

その結果、古代と島が大学に戻る頃には、北野の正体の話が約10人に知れ渡っていた。

古代と島は彼らに囲まれて、質問攻めに遭う羽目になった。

古代と島は交互に事情を説明した。

「確認しに行こうぜ」と南部が立ち上がった。

「俺も行く！」と相原も立ち上がった。「北野が本当に北上マヤならサインが欲しい」

結局一同はぞろぞろと北野が講義を受けている教室に移動した。学年が違うので、同じ講義は受けていないのだ。

やがて授業が終わって学生達が出てきた。

彼らはすぐに北野を取り囲んだ。

「なんですか、皆さん揃っていったい……」

北野は完全に男に見えた。

まさに天才的な演技力だった。

「実は確認したいことが1つあってね」

「後にしてもいいですか？ トイレ行きたいんで」

「じゃあみんなで行こう」と島がニヤリと笑った。「ツレションって奴だ」

「えっ？」北野が狼狽した。「1人で行きますからいいですよ」

「これが我々の伝統だからな。拒否はいかんぞ」と古代が笑いながらいった。もちろん、そんな伝統はあるはずがなかった。

「男同士だから恥ずかしくないだろう？」と南部も煽った。

「一緒に行くだけで別に見たりしないからさ」と加藤が笑った。

「ちらっと見えちゃうだけで」太田が下品に笑った。

「ああ、僕の天使が太田に見られちゃうなんて……」と相原が歎いた。

「皆さん、いったい何を言っているのか……」

「君が北上マヤなんだろう？」島が詰め寄った。

北野はため息を付いた。

「バレちゃったのですね」と女の声になった北野が言った。「残念だわ。

3ヶ月間、女とばれずにいられたら紅天体の主演女優に合格だったのに  
一同は顔を見合わせた。

「まさか」

「本当に女だったぞ」

「本物の北上マヤだ。感激！」

古代と島は顔を見合わせた。

その時、誰にも予測できない事態が発生した。

その場に流田姫亜弓が現れたのだ。

「大変よ、マヤ」

「何をそんなに血相を変えて」

「月影の内藤さんが……死んだの」

「死んだ？ まさか。昨日お会いしたときはあんなに元気だったのに」

「心臓麻痺よ」

月影の内藤は死んだ。

心臓麻痺だった。

子供を助けるために橋から川に飛び込んで、子供は助かったものの自分  
は助からなかったようだ。

現場の橋は大学からそれほど遠くはなかった。

古代達は、成り行き上流田姫亜弓と北上マヤと一緒に現場に向かった。

さすがに無視できない事態なので、真田と雪も合流した。

「あ」と雪が声を上げた。「緑の石が入った指輪が無いわ」

「どういう意味だい？」

「内藤さんはいつも緑の指輪をしているのよ」

「事故の衝撃で外れたのだろうか」真田は答えたが、頭では別のことを  
考えているのは明白だった。

「気になるのか？」と古代は質問した。

「ええ。石の種類を真田さんに鑑定してもらおう約束なの」

「探してみようぜ」島があたりを探し始めた。

しかし、緑の石が入った指輪は出てこなかった。

「川に落ちたのかな」古代が考え込んだ。

「流されたとか」島が首を捻った。

そこにゲールが現れた。

「ゲールさん、どうしてここに！」

「この内藤という男と会う約束をしていたのだ。だが、待ち合わせの場所に来ないから様子を見に来たらこの有様だ」

「何の約束ですか？」

「デューゼラー機関長の死因を調べているのだ」

「デューゼラー機関長……、ああ馬場ムラサキさんですね？」

「そうだ。地球ではそう名乗っていた。ともかく演劇の紅天体への思い入れがどちらも半端ではないので、何か有意義な話が聞けるかと思って約束をしたのだ」

「なるほど」

「しかし、もう1つ是非とも会いたい理由があったのだ」

「それはなんでしよう？」と真田は質問した。

「ドメラーズ二世には、固有の乗組員以外に3人が乗っていた。わし、わしの上司のドメル指令、そして親衛隊騎士団の政治将校、レオンバルド・ナインだ。発進直前に乗り組んで、あまり他の乗組員とも交流しなかったので、顔を合わせる機会も少なく、よく覚えていなかったのだが……」

「まさか。内藤さんがその人だと？」

「いや、それはワカランが、可能性はある。そして、身分確認用の秘密のサインがあるのだ。それを使えば正体は分かる。分かるはずなのだが……」

「死んでしまっっては分かりませんね」

「それでゲールさんまでここに……」古代は被害者の遺体を見た。

北上マヤが声を上げて泣いていたが、どこか空虚にも感じられた。

そして、緑の石が入った指輪は内藤の指になかった。どこにもなかった。

真田はゲールを振り返って質問した。

「失礼ですが、どこで待ち合わせを？」

「流田姫亜弓が探してきた隠れ家的な喫茶店があるといっているのでね」とゲールは説明した。「あまり目立つ場所で密談はしたくなかったので、彼がそこを選んだ」

「ゲールさんは初めてですか？」

「そうだ。内藤さんは3回目と言っていたがね」

なるほど。真田は納得した。しかし、少し話ができすぎているという気もした。この話にはまだ裏がありそうだった。

### 第3章

馬場ムラサキ邸には、馬場ムラサキの遺族、古代ら学生、真田、そしてゲールが並んでいた。

「森君に呼び出されてここまで来たが、何をするのだね？」と真田は質問した。

「馬場ムラサキさん殺害の真犯人が分かったので、ここで発表します」古代が宣言した。

「やれやれ。そういう話は警察に任せるものだ」

「しかし、馬場ムラサキさんが作っていた謎の機械の正体も分かったのです。遺族の方々もそれを知りたがっていましたので」

「ええ」と故人の娘のサキがうなずいた。「正直、あれが事故ではないとは信じられませんが、機械の正体は知りたいと思います」

「では発表します」古代は言った。「馬場ムラサキさんと月影の内藤さんを殺した犯人は、北上マヤと流田姫亜弓です」

「動機はなんだね？」真田は質問した。

「男装で3ヶ月過ごせと無茶なことを言うからです」古代は説明した。「これで殺意を感じても仕方がありません」

「だが、それを命じたのは内藤さんであって、馬場さんではないよ」

「北上マヤさんの支援者の馬場さんも、紅天体の再演を望んでいて、そのために彼女を支援していたのです。プレッシャーを掛けるという意味では同じです」

「では、あの機械の正体はなんだね？」

「紅天体の舞台の大道具です」

「大道具？」

「そうです。島、説明してくれ」古代が島を促した。

島は、引き延ばした写真を2枚並べた。

「右は、言うまでも無く馬場さんが作った謎の機械です」

「私たちはよく知っているわ」サキがうなずいた。「それで左は？」

「紅天体の舞台で使われた大道具です。亜空間ゲートと呼ばれます。遠



隔地と一瞬で行き来ができます」

「……という設定の大道具ということだね？」

「そうです。劇中の設定です。俳優はこのゲートをくぐると、舞台の下に隠れて消えたように見せかけます」島がうなずいた。

「なるほど。かなり良く似ている」

「この舞台装置はかさばるので公演が終わった時点で解体されたそうです。当時の新聞を調べました」

「そのために広尾の都立図書館に通って、最後は西国立の分館にまで行ったんだぜ」古代が得意げに言った。

「馬鹿。それは本題じゃない」島が古代を殴った。

「ではガミラシウムを探していたという話は何だね？」真田は質問した。

「ここを見て下さい」

島は指さした。

「本物の舞台装置には、ここに緑色の石が入っていますが、馬場ムラサキさんの機械にはありません。この石が入ってこそ、この機械は舞台装置として有効に利用できることになります」

「では、彼が探していたのはガミラシウムという物質ではなく、この舞台装置に見合う緑の石ということかね？」

「そうです」

「ではもう一つ質問しよう」真田は言った。「内藤さんが死んだとき、我々と一緒に現場に駆けつけた。北上マヤさんと流田姫亜弓さんも一緒だ。この状況で北上マヤさん内藤さんを殺すことは不可能だし、流田姫亜弓さんが現場にいなかったことも証言から明らかだ」

「はい。ですから自分に嫌疑が掛からないように、共犯者がいたのです」

「誰だね？」

「そこにいるゲールさんです」

「わし？ くだらん」ゲールは一蹴した。

「そうでしょうか？」島はゲールを睨んだ。「電車のホームであなたが流田姫亜弓さんと一緒にいるのを見ているのですよ」

「一緒にいたら何だというのだ」とゲールは机を叩いた。「わしは、馬場ムラサキ殺害の犯人を突き止めようと、関係者全員に話を聞いていただけだ」

「えっ？ ホテルじゃなくて？」

「ホテルには行ったとも。ホテルの喫茶コーナーでお茶を飲みながら話を聞いたからな」

「それだけですか？」

「他に何かあるというのだ」

「あれ？」

「そもそも、あの複雑精緻な機械が、舞台装置などであるはずがない」とゲールは言い切った。「月影の内藤、馬場ムラサキの死は、単なる不幸な事故死であって、そこに殺人者がいるわけではない。そして、あの機械は本物だ。稼動すれば馬場ムラサキの故郷に接続される。だが接続される日は来ない。ガミラシウムは地球には存在しない鉱石だからだ」

「困りましたわね。解釈が真つ二つですわ」とサキが真田を見た。

真田は考え込んだ。「さて、この場をどう収めたものか」

「助けて下さいよ、真田さん」と古代が声で真田にすがった。

「僕らの推理は間違っていないでしょう？」と島もすがった。

「島君。もしも君の推理が全て正しいとするなら、ここにいるゲールさんの正体を言い当てているはずだ」

島は目を丸くした。

「ゲールの正体？」

考えたこともなかったようだ。

「本件は、紅天体の再演と密接に結びついている。それは分かるね？」

真田は一同を見回した。

一同はうなずいた。

「紅天体のヒロインを演じるには、男装して男になりきるパートを演じる必要がある。そのために、北上マヤ君は北野哲という名前で男として大学に入学した。それは君たちが明らかにした通りだね？」

「そうです。僕らが発見しました」と古代がうなずいた。

「ではライバルの流田姫亜弓も男装で過ごすことを強要されていたはずだ。いったい誰に化けていたのだろうね？」

「誰って」島は視線を彷徨わせた。

「既に内藤さんが死んだ今、男装修業は無意味なので言ってしまうのだが、実はそこにいるゲールさんこそが流田姫亜弓さんの男装なのだ」

一同が声を上げた。

「ふん。やはり推理サイボーグの名は伊達では無いな」ゲールはかつらを取った。そして女性の声で続けた。「こんなに簡単にバレてしまうとは、思わなかったわ」

「古代。この場に北上マヤさんと流田姫亜弓さんと呼んでいない理由はなんだね？」

「所在不明で連絡が取れなかったからです」

「少なくとも、流田姫亜弓さんに関してはこれで所在が分からなかった理由は明白だね。彼女はゲールとして過ごしていたわけだ」

「待つて下さい」と島は抗議した。「自分は通過する快速電車からホームにいる流田姫亜弓とゲールを見えています。絶対に別人です」

「それはトリックだと思うよ」と真田は言った。

「トリック？」

「別の誰かをゲールに仕立てて一緒に立っていれば別人だと思うだろう？ 通過する電車から見える一瞬の光景なら、細部がおかしくてもそこまでは見えない」

「まさか！ 自分達が電車で通過すると読んで？」島が質問した。

「でも。電車が通過するときホームを見ているとは限らないぜ」と古代は言った。

「馬鹿。あのとき北野から電話があってホームを見ろって言われたんだ」

「あつ」

「そうだ。北野は北上マヤ君なので、上手く利用されたのだろう。ゲールと流田姫亜弓さんは別人だと印象づける工作にね」

「でも、同一人物だった……」

「そうだ。そして、真実はどちらの説にもない。もつと散文的でつまらない」

「真田さん、真実ってなんですか？」

「馬場ムラサキ。月影の内藤。どちらの死因もただの事故」と真田は言った。「殺人犯などはいない。そして、未だに流田姫亜弓さんがゲールとして振る舞うことに固執しているのは、紅天体のヒロインの座をゲットする気だからだよ。月影の内藤さんが死んでも試練をやめる気は無いのだ。いやむしろ完遂することが供養になると思っているのだろう」

「しかし、これで終わりです」流田姫亜弓は言った。「正体がばれてしまいました」

「ではあの機械の正体はいつたいなんでしょう？」サキが質問した。

「舞台の大道具という説は半分まで当たりです」

「では本当にどこかに一瞬で行ける機械なのですか？」

「そんな夢のような機械、できるわけがありません」と真田は笑った。

「夢のような機械が存在するかのように演出する高度な機構が内蔵されてきました。正常に動作すれば音や光が出て、遠い世界の幻が奥に見えたりせずでしょう。しかし、それを完成させるためのキーパーツが最後まで入手できなかった。ガミラシウムです」

「ガミラシウムとはなんですか？」

「ポーランドの企業が製造していた光学部品です。かなり前に製造中止になりましたが、不幸にして馬場ムラサキさんはそれを知らずに、ガミラシウムを前提に機器を設計してしまっただけで、入手できなかったのではありません。手頃な代替部品も無いため、結局装置は今日まで動くことはなかったのでしょうか」

「では、ガミラシウムを発見してもこの機械を通じて満州には行けないのですかね？」

「ええ、無理です。単に幻想的な光の光景が奥に見えるだけです」

真田はうなずいた。

「彼が帰ってきたのは、本物の満州などではなく。もっと別のノスタルジックな何かだったのでしよう」

## 第4章

真田は、古代と島を引き連れて馬場ムラサキ邸を出た。

「さて、話はこれで終わりではないよ」と真田は言った。

「どういうことですか？」古代は質問した。「次は内藤さんの家で推理シヨールですか？」

「そうではないよ」

「じゃあなんですか？」

「今回の出来事にはドラマのような事件性は存在しないと思った方が健全だ」

「それは、SFドラマのような肌の青い宇宙人も実在しなければ、刑事ドラマのような殺人犯も存在しないという意味ですか？」

「おおむね当たっているよ」

「でも、話はこれで終わりではないとは？」

「実は1つだけ事件性があるかもしれない小さな問題が残ってしまったのだ」

「やはり馬場ムラサキさんは他殺ですか？」古代が真田の前に興奮して立ちふさがった。

「いや、内藤さんの方だろう」島はクールに言った。

「どちらも外れだ」と真田は言った。「私が言いたいのは、そういう大きな問題ではない」

「とうとうと？」古代も島も首を捻った。

「内藤さんの指輪が行方不明なのだ」

「誰かに盗られたと？」

「それはまだ分からない。事故のショックで指からはずれてどこかに落ちただけかもしれない。だがあの指輪だけが所在不明なのだ」

「それを探せばいいわけですね？」古代は身を乗り出した。

「でも、事故直後に探したぞ」と島は冷静に確認を取った。

「川の中までは探していない。それに北上マヤが持ち去ったという可能性もある」古代が言った。

「それを言うなら、流田姫垂弓だつて可能だろう」

「誰かを泥棒と決めつけて調べるのは良くないな。まずはどこにあるのかを確認することが先決だ」

「それでは？」

「事故現場はここから電車で2駅だ。帰るついでに寄っていきこうじゃないか」

月影の内藤が事故で死んだ橋は既に整理されていて、何事も無かったかのように車が行き交っていた。

ただ、歩道に置かれた花束だけが、そこが事故現場だった事実を想起させた。

「よし、探そう。緑の石が入った指輪だ」

「島、下の川を探そうぜ」

「そうだな。おい、そのまま川に入る気かよ。ズボンをまくって、靴下と靴も脱げよ」

「分かった分かった。ともかく川底を探そう」

古代と島は手分けして、指輪探しを開始した。

真田は、事故現場に立ち尽くした。

「真田さんも探せばいいのに」 古代がぼやいた。

「待て」 島が制止した。「真田さんのことだ。指輪がどこにあるのか既に分かっているんだろう」

「まさか」

「俺達は試されているんだよ」

「これも試験ということか？」

「かもしれない」

「厳しいなあ」

「僕ら2人だけを相手に特別授業してくれていると思えば、とても優しいよ」

「それでもなあ。緑の指輪1つ探すのは骨が折れるぜ」

河原を歩いて浮浪者が近づいてきた。

「君たちが探している緑の指輪とは、これのことかね」

彼は緑の石が入った指輪を差し出した。

「あ、本当にあつた！」古代が叫んだ。

2人は慌てて川から上がった。

「いつ拾ったものですか？」

「ここで事故があつた翌日だよ。キラッと光るものが落ちていてね、拾つたものだ。しかし、綺麗なだけで値打ちはないと言われてね。誰にも渡せず持っていたんだよ」

「値打ちがないならそのまま返してもらえますか？」

「コンビニのおにぎり2個」

「えっ？」

「引き替えて」

「島、おまえいくら持つてる？」

「おにぎりぐらい買える金額だよ。おまえと違って」

商談は成立し、100メートル先のコンビニで買ってきたおにぎり2つが、指輪と交換された。

「じゃあ確かに渡したぜ」浮浪者はおにぎりを大事そうに抱えてすぐに立ち去つた。

「あんなに急がなくても良いのに」

「おにぎりを返せと言われるのが怖いんだろう」

「そんなみみっちいことを言うかよ」

その時、古代と島の背後で真田の声がした。

「さて、諸君」

慌てて古代と島は振り返つた。

「今の浮浪者の正体が分かつたかね？」

「しよ、正体？」

「まさか」

古代と島は顔を見合わせた。

「今の浮浪者は北上マヤの変装だよ。君たちを騙せるほどの完璧な演技



力だ」

「ええっ！」

「そして、この石こそがガミラシウムだったのだ」真田は指輪を手に持  
つてかざした。

「でも無価値な石だつて」

「そうだ。ただのガラスに若干の不純物が混入されているだけで、宝石  
としての価値はゼロだ。だが、ある角度からレーザーを照射すると特定の  
照明効果を發揮するように研磨されている」

「それは凄い価値じゃないですか！」

「だがそれを踏まえても、もう無価値だ」

「なぜですか！」

「紅天体の再演を熱心に推進していた内藤さんが死んでしまったのだ。  
密かにそれを望んでいた馬場さんもだ。実行委員会は、再演の中止をさっ  
き決定したよ。再演されないとすれば、この石にももう価値はない」

「他にそのパーツを使う公演があるかも知れせん」

「まず無いね。このパーツが製造中止になったのは、既に数十年前だ」

古代と島はがっくりと力を落とした。

「さて、私は研究室に帰るが君たちはどうする？」

「おい、島。北上マヤを探してみようぜ。まだ遠くには行っていないは  
ずだ」

「そうだな。あの変装を解いて女の子に戻るには時間と手間が必要だ。  
それほど遠くにはまだ行っていないはずだ」

「では健闘を祈るよ」

真田は駅に向かって1人で歩き始めた。

## エピソード

真田の研究室には真田とゲールの2人きりだった。

「頭が切れるという噂は本当だったようだな」とゲールは言った。

「ゲールさんの協力があればこそです」

「デューゼラー機関長が残したメモ類は明らかに現在の地球より500年は進んでいるガミラス文明のものだ。あれらが心ない地球人に解析されてしまえば、たとえ1%の理解でも地球は3回ぐらい滅びるだろう。全ては事故と演技ということと話を丸く収めた君は地球を救ったことになる」

「でも、200年後にはあなたがたの星が地球を滅ぼそうとするのでしよう?」

「それはまた別の話だ」

「しかし、本当に幸運だった。流田姫亜弓という天才的な演技力を持った少女がいてこそ、このトリックは成功した」

「ああ。ガミラスの仮面をかぶって、本当にこのわしに完璧に化けおつた」

「身長や体格の差も上手く誤魔化していましたね」

「その通りだ。もっと小柄だったはずなのに、どうやって身長を伸ばしたんだ?」

「地球には上げ底の靴というものがあるのですよ」

「それにしても、わしが直接流田姫亜弓に化けることを依頼しに行ったとき、それを君の教え子にわざわざ見せるように仕向けるとは策士だな」

「ええ。2人並んでいるところを見せた上で、それこそがトリックだと言えば同一人物だと信じさせやすい」

「君のような男が部下に欲しかった。いや、上司でも良いかもしれない」

「ご冗談を。本来なら銀河方面作戦司令長官だったのでしょう?」

「昔の肩書きだ」

「ゲールさんはご立派だと思います」

「そう思っていたけるなら光栄だが、それもこれも繰り返された挫折のおかげというものだ」

「それでもゲールさんの協力のおかげで話が丸く収まりました」

「私こそ感謝する。だが今はこっちが先だ」

「ええ。今はこのガミラシウムの指輪が本物かでしょう」

「そうだ。これが本物なら、これを持っていていた内藤もレオンバルド・ナインだったということになる」

真田は北上マヤが持つてきた緑の指輪をつまんで持ち上げた。

「そして、たとえ本物のガミラシウムだとしても、それをセットしてデイーゼラー機関長の亜空間ゲートが正常に動作するか」

ゲールも石を覗き込みながら言った。「確かに不明確だな。デイーゼラー機関長は信用するが、機械が長年放置されたのも事実だ」

「一箇所明確な破損箇所がありましたので、そこだけは補修してあります」

「それは助かる」

「貴重なガミラシウムでいきなり実験して良いか分かりませんが、ダイヤモンドのカッターでも傷が付きませんでした。カケラを切り出して実験に使うわけにも行きません。このまま機械にセットしてテストしてもよろしいでしょうか？」

「構わんよ。このゲートが動作したら奇跡というものだ。ダメでも文句は言わん」

「ではセットします」

真田は、内藤が遺した指輪を、馬場のマシンにセットした。

これまで何をどうやっても動作しなかった機械が音を立てて動き始めた。ゲートがぼんやりと光り始めた。

「おお。動いたぞ。真田さん、礼を言うぞ」

「まだ早いですよ」真田は言った。「これで未来のガミラスに帰れるかどうか、まだ確認ができていないのです」

「それはもうすぐ分かります」

「しかし理解できませんね。馬場さんがデイーゼラー機関長で、内藤さんがレオンバルド・ナインだとすると、なぜ2人はお互いをガミラス人だ

と認識してガミラシウムを機械にセットしなかつたのでしょうか？」

「実は直接会ったことは無いらしいのだ。レオンバルド・ナインはサブブリッジと自分の部屋を往復する毎日。機関長は機関室から出てこない男だからな。まあ、公演中の俳優としてのレオンバルド・ナインをデイーゼラー機関長が見たことは何度もあるらしいのだが、その際はガミラシウムの指輪を外していたらしい」

「でも、同じ演劇の再演を望みながら全く気づかないのはおかしくありませんか？」

「うむ。それは人為的な何かの意図を感じるが、それより機械の方が先だ」

「動作が安定してきましたね」

「ああ」

「これで上手く動いていると言いついて良いのでしょうか？」

「成功です。もう確定と思つて良さそうですぞ」

ゲールが指さしたゲートの内側には、キノコのような緑の建物が建ち並び風景が見えた。「あれは典型的なガミラスの住宅街です。しかも、最新の流行住宅ですから、過去につながつたという可能性もありません。私が生まれ育つた時代です」

「なるほど。では試しに入ってみましょう」

「待ちたまえ。あそこに行きたいのは私であつて君ではない。人体実験は自分で志願する」

次の瞬間、ゲートの中で空が光つた。

不気味な轟音が響いた。

「ゲートの不調？」

「いや、ゲートの向こう側で何かが起きているようだ」

「ガミラス特有の自然現象でしょうか？」

「いいや、一度も見たことが無い状況だ。いや、似たものを見たことがある」

「それは为什么呢？」

「戦争だ」

また空が光った。

今度は立て続けに3つだ。

「何が起きているのだ」とゲールは反射的にゲートの中に駆け込んだ。

真田も続いた。

ゲートをくぐると、それまで見えていなかったものもよく見えた。

火山がいくつも噴火していた。

「天変地異？」真田は首を捻った。しかし、それにしても見えている火山が10以上全て同時に噴火している光景は異様だった。

「真田くん、君は地球側に残っていたまえ。ガミラス固有の放射線は君たちの身体に有害だ」ゲールが真田に言った。「長時間浴びるとどうなるか保証はできません」

「分かりました」

真田は地球側に戻った。

「ガミラスとは、あのようによくつもの火山が同時に噴火するのでしょうか？」真田は質問した。

「いや。戦闘だ」とゲールは空を仰いだ。「何者かが戦っておる」

「しかし噴火は戦闘で起こるものではありません」

「海底の地殻を刺激すると大火山噴火が誘発されるという説を読んだことがある。誰かが大きな大砲で海底火山脈を狙い撃つたに違いない」

「ではあそこで戦っている誰かが犯人？」

「そうだ。天井都市で起きている戦闘の一方が、噴火を引き起こした犯人だろう」

「天井都市？」

「ガミラスは空洞惑星だ。空洞の天井には天井都市があるが、天井都市のビルには、星が減びるときに脱出するための宇宙船としての機能が与えられているのだ」

「その宇宙船が攻撃されている？」

「いや、自分から発進して敵艦に体当たりを試みているようだ。どうな

っているのだ。こんな馬鹿げた戦闘を誰が指揮しているといののだ」  
そのとき真田は気づいた。

ゲールの頭上に岩石が落下してきている。かなり大きい。噴火で吹き上げられた岩石がここまで飛んできたのだろうか。

「ゲールさん、上から岩が。こちらに戻ってください」真田は警告した。  
「かたじけない」とゲールは戻ろうとした。

だが、その時岩陰から青い肌の子供が走り出してきた。

その子供が何を言っているのか真田には理解できなかった。

「危ない！」ゲールが反射的に駆け戻って子供を抱き上げた。

ゲールはそのまま真田とは反対方向に走った。

真田は2人を助けようとゲートをくぐろうとしたが、圧倒的な熱気が吹き込んできてむしろ押し戻されてしまった。

結局、ゲールが岩石を避けられたのか、子供が助かったのか、真田からは確認はできなかった。

落下してきた岩石が、亜空間ゲートを押しつぶしてしまったからだ。

もちろん。岩石はガミラス側に存在していて地球側には存在していないかった。だから、真田自身が岩石に押しつぶされることは無かった。

しかし、半分がガミラス側に露出していた亜空間ゲート本体は別だった。岩石に押しつぶされてフレームが大きく歪み、回路から火花が散った。

真田は慌てて補助電源になっていた発電機を緊急停止させ、主動力源のガミラシウムの指輪を引き抜いた。

だが、ガミラシウムは既に9割が黒い炭の塊となっていて、馬場ムラサキの遺品の機械もあちこちの回路が焼き切れていた。

真田はすぐに焼き切れた部品をリストアップして、メモにまとめた。急いで秋葉原で交換部品を揃えればまだ動くかも知れない。そうすれば、ゲールと子供の安否も分かるかもしれない。

だが、ふと真田の手が止まった。

量産品のどこにもあるパワートランジスタだと思っていたパーツから、足が7本生えていたのだ。しかもパッケージには見たこともない文字が刻

印されていた。普通のトランジスタなら、足は3つだ。

いったい何をするパーツなのかと金属のパッケージを開いて中を見た。

中身は過電流で燃え落ちた後で、中に何が入っていたのかはもう分からなかった。

「こんな経験、語ったところで誰も信じないだろうな」

真田はそつとダメになったパーツを机に置いた。

その時、真田の部屋のドアをノックする者がいた。

「どうぞ」と真田は答えた。

入ってきたのは北上マヤと流田姫亜弓だった。

「君たちか。協力には感謝するが。君たちの犯罪行為も見なかったことにした。おあいこではないかね？ これ以上、何の用事があるというのかね？」

「確かに、私たちが内藤さんと馬場さんが死ぬように事故を発生させました。そのことに気づいたあなたの知力は敬服すべきものです」流田姫亜弓はうなずいた。

「君たちの犯罪を暴かなかったのは、宇宙人などいない、という形で事態を収めたい利害が一致したからだ。それに、君たちが使った摩訶不思議な能力を証拠にはできないしね」

「そのことを理解して頂いて助かります」

「まあ、君たち2人が殺した内藤さんも馬場さんも本当はガミラス人で、地球人の死者は1人もいない。そうでなかったら、こんな手加減はしないところだ」

「あなたが敵にならなかつたのは良かったと思います」

「君たちの非凡な演技力が、君たちの特殊能力によるものだとということも、この際不問にしておく」

「ありがとうございます」

「それ以上に何か私に望むことがあるのかね？」

「残念ながら1つだけ」

「なんでしょう？」

「あなたの知力は私たちの想像を上回っています」北上マヤは言った。  
流田姫亜弓が机の上から、七本足の謎の電子部品を手に取った。

そして、流田姫亜弓は言った。「この残骸をヒントに、あなたの知力は元のデバイスを再生してしまうかもしれません。そうすると、このゲートを再生することも不可能ではないかもしれません。でも、我々はそれを承認できません」

「承認できないとしたらどうするのだね？」

「こうします」

流田姫亜弓の手の中で電子部品の残骸は塵と化して消え去った。

「これでもう部品を再生するヒントも残りません」

「そうまでして君たちがやろうとしていることは何だ？」

「因果律の健全性を保つことです」北島マヤは説明した。「未来から過去に誰かが来て歴史が変わると、それによって未来が変わるわけではないのです。平行宇宙が1つ増えるだけなのです。しかし、増えすぎた平行宇宙は宇宙の均衡を崩します。私たちは歴史が変わってしまったように、ドメラーズ二世の爆発で未来から東京に飛ばされてきたガミラス人達を相互に会わせないように工作していました。徒党を組めば歴史を変えられるからです」

「それで、元ガミラス人の内藤さんと馬場さんが会わないように身近に接して、それでも無理が生じると馬場さんが死ぬように仕向けたのだね？」

「そうです。このゲートは動作するように作られていて、動作に必要なガミラシウムは内藤さんが指輪にして持っていました。2人を会わせる訳には行かなかったのです」

「更にはゲールさんが出現するとゲールさんを内藤さんに会わせないように内藤さんも死ぬように仕向けた」

2人は微笑んだまま返事をしなかった。

「だが分からない。彼らが帰るためにゲートを使うならそれでいいではないか」

「ガミラスは強大な軍事国家。彼らが戻れば、過去の地球は侵略されま



す」

「なぜ過去の地球を侵略したがるのだ」

「彼らが来た時代、ガミラスは地球侵略に手こずっています。科学技術が劣る過去を攻めれば占領は容易です」

「ではなぜゲールさんがゲートを使うことは妨害しなかった」

「それは、ゲールさんがゲートをくぐって行った先はガミラス最後の日だからです。その日を境にガミラス帝国は滅亡します」

「なんだと……」

「それに20世紀の東京にゲールさんは残っていない方が良いのです。時間の健全性という意味では」

「そもそも君たちは何だね？ タイムパトロールのような者かね？」

「いいえ。違います」

「ではいったい」

「神や悪魔のようなものではありませんよ」2人は微笑んだ。

「まさか。私は君たちをガミラス人同様に地球に来た別の宇宙人だと思っていたが本当は……。そうなのかね？」

2人は微笑んで立っているだけだった。

説明する気などは無いらしい。

真田はハッと振り返ると、ゲートの内部機構の破損した回路が全て見てもならない回路の残骸に置き換えられていた。回路をチェックした真田は、これが単なる特殊照明効果を發揮させる回路に過ぎないことを知った。地球ではあり得ない特殊な回路は1つも残っていないなかった。

「ゲート本体には触っていないはずなのにどうやって……」真田は言った。

「ではもうお別れです。真田さん」と流田姫亜弓は言った。

「さようなら」北上マヤも頭を下げた。

「待て。せめて君たちの本当の名前を教えてください」

「ファンタム・オレンジ」流田姫亜弓の姿がその場から消えた。

「ファンタム・グレイプ」北上マヤも消えた。

真田はしばらく2人が消えた空間を見ていた。

まさにそんな少女は最初からこの世にいなかったような感じだ。

あまりに完璧すぎる演技力。それが2人も。夢だと言われた方が筋が通る。

それから我に返った。

真田が床を見ると、清涼飲料水の空き缶が2つ転がっていた。

オレンジとグレープだった。

「やれやれ。ファンタム・オレンジ、ファンタム・グレープとは清涼飲料水の商品名じゃないか。これも、我ら若い人類に与えられた謎かけということか」

真田は頭をかいた。

おわり

## 解説

前作【ゲール東京に現る (トーキョーゲール)】では真田や古代らの前に現れたゲールは全て偽物だった。そこで、【本物のゲール】と真田の直接対決の実現というリクエストもあったわけだが、真田が単にゲールと対決しても話は面白くならない。世界観が違いすぎるからだ。そこで、もう1つ別のアイデアとして、さる天才演劇少女を主人公とする長寿コミックのモチーフを取り入れて【ガミラスの仮面】というアイデアを追加した。世界観のギャップを埋めるために、2人超天才演劇少女を活用するわけである。

従って本作は、2人の少女の登場で開幕し、この2人が消えることで閉幕する構成を取っている。

天才演劇少女が化けた青年が北野という設定は、ヤマトの操縦も砲撃の指揮も両方行う両義的な設定を反映させ、文武両道並びに、男でもあり女でもある人物として表現してみた。

北上マヤの名前は、北上夜曲に由来する。

流田姫亜弓の名前は、惑星ファンタムにいた王女様の名前に由来する。

従って姓の読み方は【るだひめ】である。

ガミラスに戻ったゲールと彼が助けた少年の生死は不明である。死んだとも生きているとも設定されていない。

ファンタム・オレンジとファンタム・グレープという清涼飲料水に関しては全くの創作である。これはファンタという商品名の实在の清涼飲料水と、ファンタムという惑星名の合成である。ファンタムという名前を持ちだした理由は、【そんな少女は実在していない】という状況を暗示するためだ。完璧な演技力は夢想上の役者にのみ可能ということだ。では、この幻影の2人の演劇少女を作り出してガミラス人を監視したのが何者であるかの設定は存在しない。読者は自由に夢想して良い。

本物のゲールと、流田姫亜弓が化けたゲールの違いは、ある人物を呼び名で区別できるようになっている。ディーゼラー機関長と呼んでいるのが本物のゲール。馬場ムラサキという名前で呼んでいるのが流田姫亜弓

の化けたゲールである。

馬場ムラサキという名前は、直接的には【眠田直】の漫画に出てくる【紫の馬場の人】に由来する。ただし、【紫の馬場の人】が贈ったのはジャイアント馬場の人形で、本作では江戸紫になっている。

本作ではほんの一瞬であるが真田が未来のガミラスに足を踏み入れる。このとき、実は【未来の真田】は戦争中であり、同じ惑星上に【未来の真田】と【過去の真田】がいることになる。この2人が出合う話は歴史が変わってしまったのであり得ない。

本作が書かれねばならなかったもう1つの決定的な理由は、トーキョーゲールを成立させるために過去の東京に招いたゲールに帰って頂くためである。しかし、死んだはずのゲールが戻っては歴史が変わってしまう。そこで、帰る先はガミラス最後の日とした。七色星団で死んだゲールが地球で過ごしてから戻るとしたら、丁度ガミラス本土決戦の時期だろうという判断による。

この先の展開だが、ゲールがガミラスに戻り既に行き来する方法も無いので、この先ゲールが登場することは無い。おそらく青い肌のガミラス人らしいガミラス人はもう出ないだろう。

ただし、ドエル四谷やドエル中野のようにドエルを冠したマンションは実在するので、ドメルの名を冠したマンションが存在するという設定を持ちこんだ話はあるかも知れない。

最終的に真田が対決する相手はホラムズ&ワタソンシリーズのホラムズかとも思ったのだが、たぶん客層が違うので書いても意味は無いだろうと思っ直した。

【ガミラスの仮面】級のナイスなタイトルを思い付いたら何か書くかも知れない。(例、コスモガンフロンティア的な)

## 遠野秋彦作品宣伝

小説・推理サイボーグ・真田の事件簿・8作合本【Kindle版】発売中。

<https://www.amazon.co.jp/dp/B06VT95GDW>

収録作品：

1. 装甲飛行船レース殺人事件
2. すべてがゼロになる
3. 推理サイボーグの敗北
4. 徳川彦左衛門と徳川埋蔵金の謎
5. 不思議なメルダ
6. 伊東に行くならマトヤ
7. 完結編・ラブレターフロム真田　　↳真田対ハイルブロンンの怪人↳
8. 外伝・推理サイボーグ・オブ・ザ・デッド